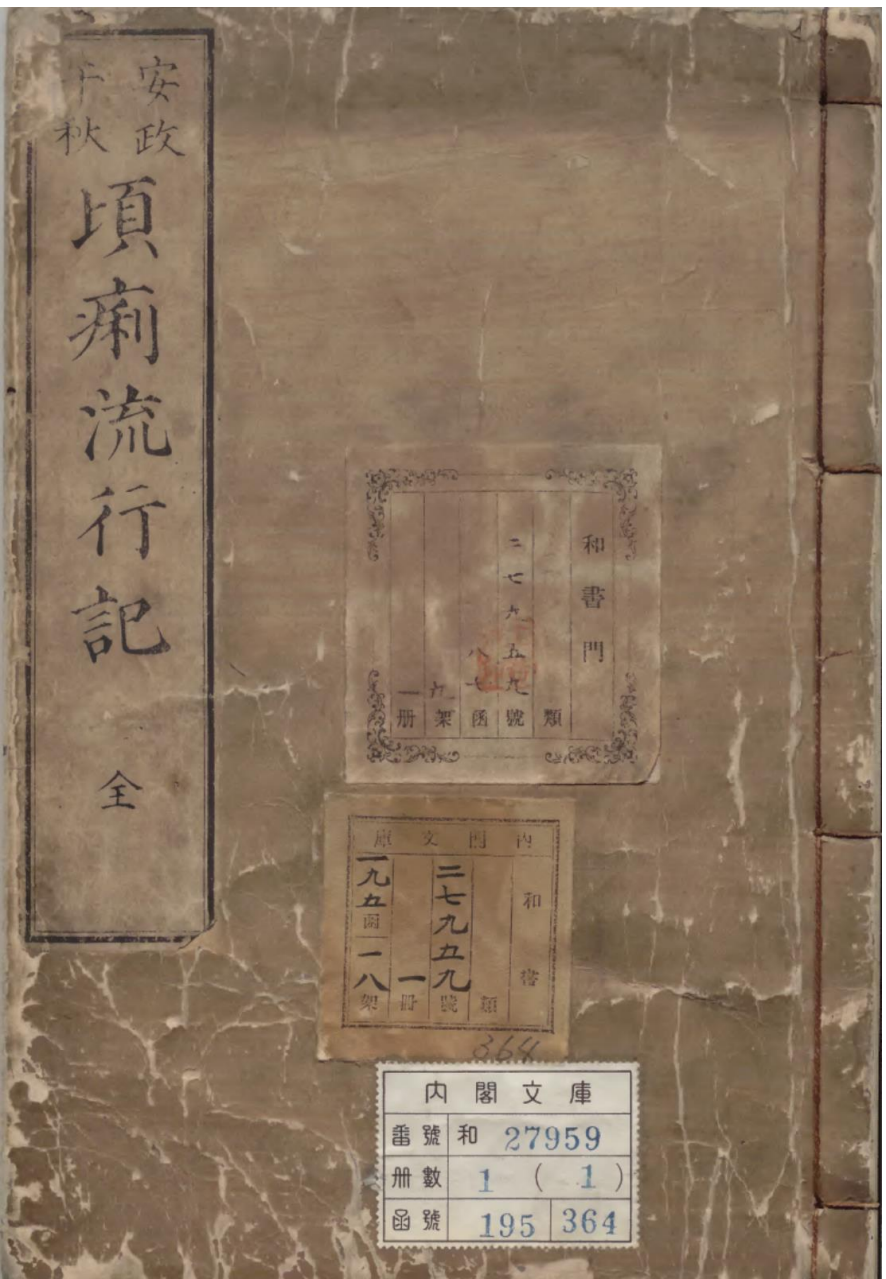


江戸のコレラ大流行

「安政午秋 頃痢流行記」の翻刻版



国立公文書館 蔵

一杉 勝

茶毘室混雑の図



煙りを上げる小塚原の焼場。処理能力を超えて入口に積上げられる棺。そこへ次から次からあらたな棺が運び込まれる。棺の形は様々、酒樽の利用もある。



はじめに

令和二年、本来ならオリンピックで盛り上がりつつある筈の日本ですが、中国に端を発した新型コロナウイルスの大流行で、オリンピックは延期、緊急事態宣言の発令で日本国中が自粛生活を強いられています。

江戸時代にも様々な感染症が江戸の町を襲いました。インフルエンザ（当時は風邪との区別がついていなかった）をはじめとして天然痘、麻疹、結核など枚挙にいとまがありません。

江戸市民の衛生知識が低かったこと、有効な予防法、治療法がなかったため、一度感染症が流行すると、その被害は甚大で、江戸での死者が何万人にも達する「災害」になりました。

このうち、コレラは鎖国政策のため、世界の流行が日本に波及する事を免れていましたが、安政年間、五カ国条約が締結され、外国人が日本に来るようになると、「防波堤」がなくなり、安政四年（一八五八）にコレラが長崎に上陸、たちまち全国を席卷する大流行となりました。

このコレラ大流行の惨状をまとめて刊行されたのが「安政午秋 頃痢流行記」です。著者は金屯道人こと仮名垣魯文とされています。多数刊行されたらしく、国立公文書館や早稲田大学図書館、国会図書館、京都大学、大阪中之島図書館、長崎大学などに多数現存、所蔵されています。

この史料によれば、安政五年（一八五九）の八月が感染のピークとなり、この月だけで江戸市中の死者が一万二千五百人にのぼったが、九月中旬にはたと感染が止ったとあります。

当時の江戸の人口などの数字には間違いと思われる箇所もありますが、文章はなまなましく江戸の流行の模様を伝えています。

昨今の新型コロナウイルス大流行で、過去の感染症流行について改めて調べる動きがあり、この「頃痢流行期」も注目されているようです。この史料の翻刻本を探して見ましたが、管見のかぎり見当たらないので、浅学ながら翻刻を試みました。

原文を編集し、解読文と対照する形にしましたので、医学史を研究する方以外に、古文書の解読を学ぶ方などの参考となれば幸いです。

令和二年（二〇二〇年）七月

凡例

- ・ 解読文は原文をそのまま活字に置き換え、漢文の読み下し文にある返り点（し、や、一、二点など）は省略した。
- ・ 漢字は原則として常用漢字としているが、原文のくずし字が旧字をくづしたものであることを理解してもらうために、解読文にも適宜旧字を使用している。
- ・ 変体仮名は原則としてひらがなに直した。本文は旧仮名づかいのままとしたが、ふりがなについては現代仮名づかに直している。
- ・ 助詞の「者」「而」「茂」「与」「は」はそれぞれ「は、て、も、と」と表記した。しかし、目的格助詞の「江（え）」「に」「は」は違和感があるため、現代語のよう「に」「へ」と表記した。
- ・ 「よ」は「よひ」「よじ」「よ」はそのまま表記している。
- ・ 原文に句読点がないことが多いが、読みやすく、意味をとれるように解読文には多めに句読点をいれている。

轉寢の遊目序

正享間紀と云ふ書法中は正徳六年の夏
熱志おちくせり流行る大江戸のちりくよ
病て死する個月のうちに八条の陣りぬるも其

棺せよりまぬく酒の意柄を睡ふて亡骸成

わら死する院は聖徳送るおきとまは場も埋りに

足ふあられを宗体せ徳とて火葬あつて

清おとめ次は法中急な徳も茶田所よ

おと敷の敷をうもぬく積重を半月とて

坐も鏡を能く尺刺来の頂を徳を日敷たるかり

経を重た老法七骸のいにもはとてあつて交の

長ごまかひも偏りて終り

公廳は術しりしてに最もかゝると泰命を蒙り

速小寺院におややく華重難も一回向乃後り

菰むらゐるは宅く船は宗せ品川の神よ志つるを

水葬よおきせぬひとを祀うされ安んずるびの

転寝の遊目序

正享間記てふ書の中に、正徳六年の真夏、
熱症おほく世に流行て、大江戸のまちくに
病て死する、個月のうちに八萬に余りぬるにぞ。
棺を工いとまなく、酒の空樽を贖ひて亡骸を
おさめ、寺院に野辺送るおき土の場も、埋るに
咫尺なければ、其宗体を論ぜず、火葬ならでは
請おさめず、このゆえに誰も渠も茶毘所に
おくるに棺の数かぎりもなく積重て、半月を過れ
ども焼こと能はず、到来の順を待ば、日数はるかに
経て、貧き者の亡骸はいかにもすすべなく、處の
長がはからひにも届かで、終に
公聴に訴へまうしに、最もかしくき泰命を蒙り
速に寺院におほせて、葬り難きは回向の後こ
拵むしろに包て船に乗せ、品川の沖こつじゆめて
水葬になさせ給ひしとぞ記たり、されば此たびの

暴病ひつねまひよ人ひと能えんかやえんくえん換かさるえんよえん海うみもえんそれ時ときの事ことよ
 似にひひれれががいいうう一いち戎じゆ當たう時じははたたららくく今いまもも世よに
 ととぬぬるるおおろろくく候こう梅うめももささししててええりりののせせもも昔むかしももああびびよよ
 ううししるる一いちのの熟じゆく志し婆ば心しんををむむおおののええ控とどむむらら坐ざらら
 如に之の如にくく一いち種しゆのの暗あん記きををいいくく序ぎよ梅うめるるののほほしし

安政つちねえ年の始まる月

ちねえはるはあまいかりにすむ

紀のあらし



白樺道人筆

暴病にわかちやまいに人のおほく損あずるさまも、その時の事こと

似かはひたれば、いにしへを当時はなごころにたへらべ、今もむかし

となる折はなごころがら、談柄はなごころともなつてんものをも、筆ふでまめびこの

かひしるしたる老婆心らふしんを、むげに見捨みすせしもの

本意ほんいなく、一種いっしゆの暗記あんきをもて序かじに換かへるものなご

④

安政やすしつちのえ午うまの秋あききへ月つき

はじめの八日やっぴちに ぶきいほりにすむ

紀きのおひかへつ

白楳道人 筆

註

- ・ たくらべ…接頭語「た」+くらべ くらべると同じ意
- ・ かいしるす…書き記す 「かい」は「かき」の音便
- ・ はじめの八日…初旬の八日、つまり八日のこと
- ・ 白楳道人…この絵を描いた人か。 「楳」は梅の異体字

(一) 流行記概略

安簡勞痢流行記概略

紅花の風に散、黄葉の霜に移、盛なる物の衰ること、此世の
ならび自然なり。さるが中に、常ならぬ風に誘われ、少きが老るに先立も
又定りたる業にして、生死は決て量べからず。しかはあれ、当時流布の
暴瀉病にて死する者、凡俗の心には更に天命とは思ひ設ず、今爾安政
五戊午年六月下旬、東海道筋より流行初、近国一円にひろがりて
此病に犯さるゝ者、九死に一生を保つは稀なり。遠く隔る地は去来不知
僕が輩、既に目前に見聞する土地をいはんに、大江戸は七月の下旬
赤坂辺に始り、靈岸島辺にも多くありて、日ならず諸処に
押移り、八月上旬より中旬に至りては病倍々盛んにして、死する者
大きは一町に百余人、小きは五六十人、葬禮の棺、大道小路に陸
続て、晝夜を棄ず、絶る間なく、御府内数方の寺院は何所も
門前に市をなし、焼場の棺、所せきまで積ならべて山をなせり。
夕に人を焼葬坊も、日に茶毘の煙りと登り、詭へられし
石塔屋も、今の間に自己が名を五輪に止るなど、一々に言せ
尽せず、博識の漢の倭の史とも披閲ても、未かゝる例を見
出ず、名だゝる医工の鑑定にも、病根名證を知るよしなく、
徒に頭を傾け、手を拱きて、死を待のみ、如何とも方便なし。
適々芳香散の如き御伝方、阿蘭シーボルトの経験など、救急

註

コレラの異名 簡勞痢、暴瀉病、頃痢、狐狼狸、虎列刺、虎狼痢など
多数ある。

の要方と傳ふとも。卒病即死用ふる留る。後するふ時と身ふたふ
 とやびきりあり。とちあり。あひま。せう。いひあひ。ようきんけん
 土俵病と扱狼程と揮号して。あひ統と流言。怪怪愛化の
 所為あり。且水毒といひ。氣毒といひ。是か病ふ病の上下。あふ
 流交五門の流を返さ。盤小喃。生息と喰ふ。まも。ゆ。日。夜。は
 福小札さねん。成慈の門。左の。神の守札と。張八。指の本。の。を
 均一。扱十字街。の。法。音。の。神。妻。と。昇。出。し。獅子。頭。と。舞。し。
 幣。帛。と。振。濱。藩。し。新。並。家。あ。と。扱。淨。め。る。あ。む。か。る。奉。の
 儀。色。あ。べ。し。と。あ。め。り。死。門。也。松。竹。を。鏡。に。五。七。五。三。繩。と。引
 巡。り。と。美。豆。と。前。日。あ。む。六。厄。柳。か。と。外。面。不。あ。り。あ。り。その。扱
 紙。圓。會。と。年。紙。と。を。お。交。へ。る。を。扱。せ。り。是。る。ん。奉。當。有。の。珍。り。り
 あり。古今。奉。の。不。必。後。自。れ。目。前。不。見。し。頼。未。と。記。す。川。の。毛。
 神。仏。の。衣。履。雲。葉。の。効。驗。と。志。し。と。め。後。患。あ。り。ら
 とも。あ。ん。子。の。奉。不。倫。か。と。奉。地。送。人。ま。ま。り。ん

の要法を得るとも、卒病即死、用るに間なく、服するに時を失ふ、故に
 土俗病名を狐狼狸と揮号して、あらぬ説を流言し、妖怪変化の
 所為なりとし、且水毒といひ、魚毒とす。是が為に市中の上下、水上
 清き玉川の流を汲ず、盤に踊る生魚を喰ず、貴も賤も、日夜此
 病に犯されんことを愁ひ、門戸には諸神の守札を張、八つ指の木の葉を
 釣し提、十字街は鎮守の神輿を昇出し、獅子頭を舞つ、
 幣帛を振瀆繙かし、軒並家毎を祓浄めるあれば、かゝる年の
 疾過ぬべしと思ふより歟、門辺に松竹を飭り立、七五三繩を引
 巡らし、煎豆を時もあれば、厄拂ふとて外面に来るあり、その様
 祇園会と年越とを打交へたる心地せり。是なん未曾有の珍事
 にして、古今来の不思議なれば、目前に見し顛末を記るついで、
 神仏の庇護靈薬の効験をも誌しとゞめ、後患なから
 しめん事の用に備ふと、金屯道人まうす。

註

・幣帛：神道の祭祀で神に奉獻するもの。



・瀆繙・瀆翻（ヒンパン）：旗などの風に翻えるさま

・金屯道人：仮名垣魯文の号

仮名垣魯文（文政十二年～明治二十七年十一月）

江戸末期から明治初頭にかけての戯作者、新聞記者。

江戸京橋生まれ。本名は野崎文蔵、号は鈍亭、金屯道人、猫々道人など

於出島千八百五十八年七月十二日

昔日本安政五年五月

此為三日中出島市中も一時は下痢止退吐が乏しい右患
と既に昨日十二日一時は二十人相煩が又西暑利和蒸氣証之
ヒ一ふあつても右松之腹痛多人数有る右右病系之
流行のり結と皆終に右も他國もも次日多分致り申

一隣國唐古もも此洲市海岸よりコレラアシアテイス之病名
流行仕右之府日之死失多人数有る由依之出為り
此在の歐邏巴人とも之府を右下痢結の外憂症仕實
のコレラ病は右お成程防方仕儀は右松之右松之
其実お致り申右病之害とお城の食物影然と申右食
物禁止仕保禁多く高知申

才一 胡瓜

才二 西瓜

才三 李子 杏子 桃

右二品之極大事之下痢不可服物は右松之才三品
於日本お用ひ極く未熟な菓物是も影無害に
一 歐邏化之諸品其分國に於いて右松之病致る
右病之増長防む其國民之右害を成し食料之儀

(二) オランダ医官の報告

於出島 千八百五十八年第七月十三日 当日本 安政五年五月

此両三日中、出島、市中とも一時に下痢、且追々吐かゝり申候、右患病の者、既に昨十二日、一時に三十人相煩、将又亜墨利加蒸気船ミシシヒーにおいても、右様の腹痛多人数御座候に付、右病原は究て流行のものと奉存候、右は他国にても頃日多分発り申候。

一 隣國唐土にても、諸街市・海岸にはコレラアシアテイス病名流行仕、右に付、日々死失多人数御座候由、依之出嶋に罷在候欧羅巴人どもに付ては、右下痢殊の外変症仕、実眞じつしんのコレラ病に不相成様、防方可仕儀に御座候、右の模様にては

⑦

眞実相発可申、右病の害と相成候食物顯然に御座候。右食物類禁止仕、保養の手當示置申候

第一 胡瓜かぼち

第二 西瓜すいか

第三 李子 杏子 桃

右二品は至極大事の下痢、不可服物に御座候、第三品は於日本相用候様の未熟の菓物、是は顯然害に相成申候

一 欧羅巴の諸国、其外国々において、右様の病気発候節は右病の増長防候為、其国民の右害に成候食料の儀

註

・ミシシヒー…ペリー艦隊の艦船ミシシッピー号の事。中国を経由して長崎に入った際、乗員にコレラ患者があり、これが長崎の町人に感染したといわれている。

・コレラアシアテイス…アジア型(古典型)のコレラと意味か。他にエルトル型があった。

告知也勿延 貴國禁酒之令 必用之儀 亦其の儀と 和
榮政府醫師多 役目之儀 且又日本人之身白志

右之通り 養生法一統 亦方強を 強中上儀と 此令の

才一 加凡 丸末 熟と 杏子 菓子 亦用儀 儀禁酒事

才二 人々 裸と 加る 夜氣 福ふ 中根 人拭 中 飲ふ

皮の衣 衣履 履の 履入 中 穿 履 事

才三 日中 暑氣 之 於 除り 人 勞之 仕事 後 亦 事

才四 嗜 嗜 弱と 行 行 酒 各 之 儀 事 事 害に

お成事

才五 若し 下 廁 亦 免 儀 之 亦 根 療 用 之 事 事

於 豫 儀 之 儀 事

右之通り 上之 状 合 之 事 亦 甚 難 儀 危 故 之 事 コレ 病 除

去 之 亦 賢 事 可 之 儀 儀 儀 儀

和葉海軍方第二醫官

於日本寓理學官

ウエーエルボム、ヘファン

メードルフコールト

この頃の長崎出島船場の榮人より奉修所へ出た和蘭人々今日本
國の右病の流行するにありざることを一めんがとあらはし
世界のどろろひもろろり知らん

告知せ、勿論売買禁候事必用の儀に御座候、依之和

蘭政府医師たる役目に御座候。且又日本人に付ては

左の通り養生法一統示方、強ては難申上儀に御座候

第一 胡瓜・西瓜・未熟の杏子・李等相用候儀堅禁候事

第二 人々裸にて夜氣に触不申様心掛可申、夜分

決して衣類覆はず寢入申間敷候事

第三 日中暑氣にふれ、余り心労の仕事致間敷候事

第四 諸情弱の行、殊に酒呑過候儀、もつとも害に

相成候事

第五 若し下痢相覚候はゞ、直様療用の手当致し

猶予いたす間じく候事

右の通り申上候訳合にて、私共を襲候危敵たるコレヲ病除
去候、御賢慮可被為在儀に御座候

和蘭海軍方第二医官

於日本窮理学官

ウエイエルボム ヘフアン

メードルフワールド

この写は長崎出島、舶来の蘭人より奉行所へ書上候和解にして、全く日本
国のみ右病の流行するにあらざることをしらしめんがため、とくにしるして
世界のわずらひなる事顯然たり

(三) 御触書

御触書の写

此節流行の暴瀉病は、その療治かた種々ある趣に候得ども、その中、素人心得べき法を示す、予め是を防ぐには、都て身を冷事なく、腹に木綿を巻、大酒大食を慎み、其外こなれ難き食物を一切給申間敷候、若此症催し候はゞ、寢所に入て飲食を慎み、惣身を温め、左に記す芳香散といふ薬を用ゆべし、是のみにして治する者少からず。且又吐瀉甚敷惣身冷る程にいたりし者は、焼酎壱貳合の中に、龍腦、又は樟腦壱貳匁を入てあたゝめ、木綿のきれにひたし、腹并に手足へ静にすり込、芥子泥を心、下腹、手足へ小半時ぐらいつゞ張べし

芳香散 上品桂枝細末 益智同 乾姜同 各等分

右調合いたし、壱貳はいつゞ、時々用ゆべし

芥子泥粉 餛飩粉 各等分

右あつき酢にて堅くねり、木綿きれにのばし張候事、但し間に合はざる時は、あつき湯にて芥子泥ばかりねり候てもよろし

又法

あつき茶に、其三分一焼酎を加し、砂糖を少し加へ用ゆべし、但座敷を閉、木綿きれに焼酎をつけ、頻りに惣身をこするべし

但し手足の先、并に腹冷る所を温鍊、又は温石を布に包み湯をつかひたる如き心持に成程こするも又よし

右は此節流行病甚しく、諸人難義致し候に付、其症に拘はらず

早速用て害なき薬法、諸人心得のため、無急度相達候事

午八月

註

- ・芳香散…漢方薬の一種。食欲不振（食欲減退）、胃部・腹部膨満感、消化不良、胃弱、過飲食、嘔吐などに効能があるとされる万能薬。
- ・心下…（漢方）みぞおちのこと
- ・桂枝…クスノキ科のケイ、またはそのほか同属植物の若枝。生薬のひとつ。
- ・益智…ヤクチという生姜科の植物の果実を材料とする生薬。
- ・乾姜…漢方薬に用いる生薬の一つ。生姜の根茎を湯通し又は蒸し、乾燥したもの。

世に小塚糸辺此後死人をばり救ふ之に及手より兼救日也
候に候し重典字立下谷辺沙弥等並木を疎之并迷惑之候も
歎中を物更意盡け侍りて其の身業をあれは老尤腹痛候熱等
之病候お憂で中を醫及方へ此首を公死候し此候に付尚分候
埋木茂候し此死又い手より候し方々有之計栗動候し
之次牙とふ玉指精と生此物へ中渡候
右に通寺社奉修の生助へ中渡候町中を心得り以埋英之
儀九年此換の中渡候

年八月

此宮流移之病候より死亡人多く市中一統悲縮之候り中より
祈禱と唱を控之神樂或ハ獅子舞木敷中町内持出候此式之
候早免形意除候儀を控き老尤公得遠と為候之不業候為
候とも程中候し祈禱木候し此儀を捨別多人救集り候子
わくの字目と遠此首挿火之用公志勿漏候と相違候儀等之換
兼の中後重此有候候に在候右体公得遠有之為公金く
風守追之儀と相違候儀
有之ゆり商人と弟及中町役人尤追息候て及沙汰此条を旨
町中不渡候に觸知りの也

年九月

千住小塚原辺、此度死人おんぼう数多の事故、手廻り兼、数日その
俣に致し置、臭氣立、下谷辺、浅草辺等は殊の外迷惑の趣にて
夜中は猶更甚敷、此体にては右臭氣にふれ候者共、疫癘・敗熱等
の病症相発可申と、医道方は此節より心配致し候趣に付、当分仮
埋等も致し候歟、又は手廻し致し方可有之哉、厚勘弁いたし、右様
の次第に不至様精々其筋へ可申渡候
右の通寺社奉行より其筋へ申渡候間、町中其心得を以、埋葬の
儀取計候様可申渡候。

午八月

此節、流行の病症にて死亡人多く、市中一統恐縮の余り、中には
祈祷と唱、手遊の神輿、或は獅子頭等、夜中町内持歩行候哉の
趣、畢竟邪氣除候儀と、軽き者共心得違にて、右様の所業致間
敷とも難申、穩に祈祷等致し候儀は格別、多人数集り候様子
にては平日と違、此節柄、火の用心は勿論、都て物騒敷儀無之様
兼て申渡置候に付、相愼可罷在儀、右体心得違有之間敷、全く
風聞迄の義と相聞へ候得共、御中陰中、萬一心得違の者
有之候はゞ、当人は不及申に、町役人共迄急度可及沙汰候条、其旨
町中不洩様可触知もの也。

午九月

註

疫癘…悪性の流行病。疫病

敗熱

御中陰

○此昔深川富吉町道具屋何来者流形病あて死し
貧窮ある中々の藝具調業は若く棺桶と絶せし日毎に十六
宛出せ是又未嘗有の功徳あり也

○尚八月中旬旬佃島漢沙何来者若く強執死つたるふと
近隣のお近ありまり神友被験の祈りせよとくさぬと攻る
ふや執彼者の解と括出舟の方へ逃去成在あふ人返欠て是を
捕へる時打殺しえられ長る若のせうふいよく彼執の死骸を
焼捨く烟とやそ遠よ三尺に方此祠と建て霊を奉りまら
尾崎大明神と崇るとぞ

○京橋南傳る町を丁目捕屋何来の娘尚病お死さすは深志
しく絶由入登き形相され父母大いふおとろき周業近邊の
町醫横田何来と乞く見せしむるに彼医者容解せしちん採葉
あくととも存命見未うささど由持葉一貼と奉らせんとそ

調合るさうち被服へ岡札おし息ええしうへ医沙も申去り
そとく小程を死我家へ立帰るしおいかししん忽比小腹
いそそその怪し息絶る妻あるものかど死たの形しむ
近隣のお老をあつまりさぬぐ小女抱きせども顔色死相お
寸採も通つた時死にけ医者招きし捕屋あてしむまお死
死骸を棺の中へ納んらるるおあさも彼娘死後とけ
獲生しうへ父母をためけつうの人と再び驚くさつうある
つ首毫の浮本よ何ひする如くあふる大いさうは死すし

○此節深川富吉町道具屋何某なる者、流行病にて死したる
貧窮なるやからの葬具しづのえ調てい兼候者へ、棺桶を施すに、日毎四五六
宛出す、是又未曾有の功德ならずや

○当八月中旬、佃島獵師何某なる者に、野狐やこ取つきけるにぞ。

近隣の者駈あつまり、神官修験の祈りを乞ひて、さまざまと攻ける故
にや、狐、彼者の躰たいを拔出いで、外の方へ逃去を、在ありあひ人々追欠かけて、是を
捕へ、即時に打殺してければ、長たる者のはからひにて彼狐かのの亡骸を
焼捨て、烟となし、その辺に三尺四方の祠を建て、霊を祭り、すなはち
尾崎大明神と崇あがめげぬん。

○京橋南伝馬町き丁目桶屋何某の娘、当病に犯され、吐瀉あわて甚

しく、絶も入べき形相なれば、父母大ひにおどろき周章、近辺の
町医横田何某を乞て見せしむるに、彼医者、容躰をうち見、脈察
して、とても存命覚束なし、されども捨薬一帖を参らせんとて
調合なすうち、彼娘かのは悶乱もんらんなして、息たえしかば、医師も本意ほんいなく
そこくくに程近き我家へ立歸りしが、いかゞしけん、忽ちに腹
いたみて、その俛ほに息絶たり、妻なるものおどろきかなしむに、
近隣の者、走はせあつまり、さまざまに介抱なせども、顔色死相に變じ、
寸脈も通はず、此時先に此医者このいしやを招たりし桶屋にては、むすめの
死骸を棺の中に納んとしける折、ふしぎにも彼娘、茫然として
蘇生よみがえりしかば、父母はじめ、あたりの人々、再び驚おどろくばかりなるが、
盲亀もうきの浮木うきにあひたる如く喜よろこぶ事大かたならず、此はしを、
両親ふたおや

註

野狐…

捨薬

本意なく

盲亀の浮木にあう

かゝりたる医師の方へ告しらすに、医師は只今死したりと云ふしければ、再三驚腑駭嘆し、当病の火急なるに舌をまきたるにても、いぶかしきは病者の死したりしと思ひしは、却て蘇生、人を活さんとする医師は忽ちに死す、死生時を同じうして、手の裏をかへすより速なり、されば娘が入らんとせし棺は不用になりたればとて、彼医師のもとへ送りやり、彼方の有用になしたりしも因縁とこそ思はれたり、○湯嶋三組町魚屋何某の妻、店に出て品物を売、銭を取んとしてその仮倒れ、小半時の間、吐瀉甚しく、咽のあたりにふくた(らカ)みたる物出来て苦惱甚敷、終に其時を過さず、息絶けるに、彼のんどの一物、口中より黒氣と成て立昇り、消うせけるもふしぎの事也

(五) 流行時疫

流行時疫 異国名 口口

- 一 薄羅紗、又はうごん木綿、或はもんぱの類に口口
- 一 昼夜とも腹を二重ほどまき置へし
- 一 桶に湯をいれ、からしの粉を五タムシ其中に口口
- 一 加えて、折々両脚の三里の辺まで浸すべし
- 一 家の内に何にても炷ものをなして温気を除へし
- 一 一切の果類を多く食ふべからず

同治法

- 一 此病をうけたのしと知らば、熱き茶の中へ、其茶の三分一焼酎を入れ、砂糖すこしを加えてのむべし
- 一 又座敷をたてこめて、風にあたらぬやうになり、其上、羅紗のきれ、又はもんぱに焼酎をつけて、惣身を残る方なへしすのしこめし

但し手足又は腹などへよへ意をつけ、ひえぬとじろあらば、温鉄或は温石をあたくめ、布でじろみ浴湯せしほごの心持になるまで摩擦へし

于時安政第五戊午年八月

施 印

一ひらば、何がこのウツサス
桜木にのぼせしほやいじつ
給ひたるを、又いへくくじつせ
じつえい、ひらひひひひひ
るゆえにや、此手当じつ
すかるものごとくじつせ

註

もんぱ
両足の三里ほど
炷(たき)もの

(六) 焼場の様子

○余が知己なる何某、当八月中旬、こたびの
暴病にて死せし者の為に、小塚原なる茶毘
所に至りし折、人焼葬坊人足の語れる様を
聞たりしに、去る七月十五日の頃より、焼釜追々

に一ぱいに相成て、焼数多分なりと思ひの
外、月末に至りては、少しく減て

釜焼も余り候ひしに、八月に至り、

四日より五六日の間は、死人二三十

宛も残り、十日過より六百人程も

焼残り候へば、此分

にては、中々今日より

来れる分は

九月二日三日

頃ならでは

骨揚には

相不成、如此の

次第故、金子

何程出し給ふ

絵の中の地名

橋場

汐入つつみ

小塚原

みのわ

やきば

新吉原

とも、中々火急に焼候事は出来不申と物語れり。彼人、辺をかへり見るに、庭
に積上たる棺の数限りなくしてかきふるに間あらず、始は大通りを至りしかど、其帰る
さには三輪辺に所用あれば、焼場の裏門を抜出んと、諸院の園中を指覗きつゝ
其処を過るに、諸宗はさもなけれど、一向宗の茶毘所は殊に多く、棺をかき入るゝに
場所なければ、往還の傍に積揚て両側に充満し、道はゞ一身の往来のみなれば、

其奥京を故多拭せりて半面を包ま是早小新町は通小出るりしが
 返り茶毘不持とら棺の救僅来よ引續死て上原廣小治まをもの
 殺るぞ一がとせり不半時のも及い半左不たふとく茶毘不小をを
 死人とおぼしき棺救の七百七十三ありしとを骸嘆の跡里余小錯せり

(七) 府内人口、御救米

○ 府内は里は方町を三十八百十八丁各三十六丁を里ありて百六十八
 十三丁ありは又里茶浮病流行あつ死に人多く傷くは救半中並
 ○ 表店八十五万十二軒
 男 二百四十万人
 女 二百七十七万七千七
 女子三合ぶちとては算る
 女子百八十八林四合
 ○ 表店九十二万五千二百三軒
 男 百一十五万五千
 女 八十六万二千二百八
 女子三合ぶちとては算る
 女子百八十三万三千二林

○ 盲人 九千百十三人
 ○ 出家 七万百十人
 ○ 尼坊 二千九百八十人
 ○ 神主 八千九百八十人
 ○ 山伏 六千八百八十人
 ○ 山伏 六千八百八十人
 ○ 山伏 六千八百八十人
 ○ 山伏 六千八百八十人

○ 伴長袖代傳之文終
 小のふが死に人多く傷くは救半中並
 ○ 貞氏男二千一萬六千廿
 女 二千九百七十七人
 ○ 貞氏男二千一萬六千廿
 女 二千九百七十七人

府内町方熱之救合て
 七百七十三百十八人
 今般少救く候ハ表裏
 不限貞氏への之計不為り

右に少救米六万俵あり
 刻符を以て多しを
 貞氏田母少救米合て
 二万三千九百七十八斗
 右に少救米六万俵あり
 刻符を以て多しを
 貞氏田母少救米合て
 二万三千九百七十八斗
 右に少救米六万俵あり

其臭氣甚敷、手拭をもて半面を包み、足早に新町の通に出たりしが、追々茶毘所に持はこび棺の数、往来に引続き、上野広小路まで、その数かぞへしが、わずかに半時の間、道は半道にたらずして、茶毘所に遣す死人とおぼしき棺数のみ百七十三ありしこと、駭嘆の余り余に語れり

(七) 府内人口、御救米

○御府内四里四方、町かず三千八百十八丁、各三十六丁おのゝき里にして百六十八里十三丁なり、此度暴瀉病流行につき、死亡人多く、依之御救被下置

(上段)

○表店 八十五万十三軒

男 三百四十万十四人

老き人五合ぶちとして此米高

老き万七十七石七升

女 百七十万二十八人

老き人三合ぶちとして此米高

五千百石八升四合

○裏店 九十二万五千二百二軒

男 百一十一万千二百二十人

老き人五合ぶちとして此米高

五千百五十五石六斗

女 八十五万千二百八人

老き人三合ぶちとして此米高

二千五百五十三石三斗二升

(中段)

○盲人 九千百十三人

○出家 七万百十人

○尼僧 三千九百九十人

○神主 八千九百八十人

○山伏 六千八百四十八人

× 九万九千四十八人 此米高

四百九十五石二斗四升五合

御府内町方惣人数合て

× 七百万三千三百十八人也

○今般御救の儀は表裏に

不限、貧民へのみ被下置るゝ

(下段)

○但し長袖・地借・三才以下

には不被下、死亡人は勿論也

○貧民 男三十一万六千廿人

此米高 老き万五千八百老石

○同 女子 廿万七千五十六人

此米高 八千百十六石八斗

右は御救米六万俵高御

割付を以被下置るゝなり

貧民男女御救米合て惣

× 二万三千九百七十七石八斗

為四斗相場、此代

× 金六万両 なり

註 ここにある江戸の人口などは正確でない。当時の江戸の人口は町方約五十万人とされている。この記事の総人口七百万万余人は余りにも大きすぎる。

○流石の病せりつゝ病も難く此中二名は四方に傳へて御
らん祀をせし職の差別あるも一之又余病も病るべき歎

書家 大竹蔭塘 作者 緑亭川柳 画師 菅、所其一 役者 松本虎五郎

同 市川米庵 同 柳下亭種員 作者 樂亭西馬 同 尾上橋之助

俳諧 惺庵西馬 画工 歌川國郷 太夫 清元延壽 同 嵐小六

同 福芝齋得蕪 角力 宝川石五郎 同 清元滌太夫 同 嵐岡六

同 過日庵祖郷 同 万力岩藏 同 清元鳴海太夫 三弦 岸沢文定

狂哥 燕栗園 三弦 杵屋左門 同 清元秀太夫 作者 五返會半九

講談 一竜齋貞山 同 鶴沢戈治 同 都与佐太夫 女匠 都千枝

咄家 馬 勇 同 清元市造 太夫 常磐津須磨 女匠 常磐津文字栄

同 上方戈六 碑名 石工 龜年 同 常磐津和登 同 同 小登名

画工 立齋廣重 画家 英一 笑 太鼓 坂田重兵衛 作者 山東京山

同 櫻窓三拙 狂哥 六 象園 人形 吉田東九郎 同 豊竹小玉

○高時のされもすむくひとてはなすまうけ

備金で安安安一筋〜〜〜むだづうや運途の被〜〜〜る

世にハ医者の九ありを死出のふりハこれ後後神のまらふ

世の〜〜〜我吐く賤布の〜〜〜三日精〜〜〜と濃法けもは

流石ふむれさる〜〜〜中〜〜〜ハ〜〜〜と為もよる〜

埋ら〜〜〜情傷の園の苦の中〜〜〜何と〜〜〜と人

「おふり〜〜〜二日ハ佛〜〜〜と〜〜〜」

知と〜〜〜の〜〜〜ハ〜〜〜の〜〜〜ハ〜〜〜と〜〜〜

紀のそり〜

作者ふね

それせん

思 晴

他〜〜〜らん

志る 様

(八) 著名人の死亡者

○流行の病をもって身まかる人々の中に、其名四方よもに聞えしを聊

こゝに記す、猶貴賤の差別なきは見ゆるし玉へ、又余病もあるべき歟

書家	大竹蔭塘	作者	緑亭川柳	画師	菁々所其一	役者	松本虎五郎
同	市川米庵	同	柳下亭種員	作者	楽亭西馬	同	尾上橋之助
俳諧	惺庵西馬	画工	歌川国郷	太夫	清元延壽	同	嵐 小六
同	福芝齋得蕉	同	角力 宝川石五郎	同	清元染太夫	同	嵐 岡六
同	過日庵祖郷	同	万力岩蔵	同	清元鳴海太夫	三弦	岸沢文字八
狂哥	燕 栗園	同	三弦杵屋六左衛門	同	清元秀太夫	作者	五返舎半九
講談	一竜齋貞山	同	鶴沢才治	同	都与佐太夫	女匠	都 千枝
嘶家	馬 勇	同	清元市造	太夫	常磐津湏磨	女匠	常磐津文字榮
同	上方才六	碑名	石工龜年	同	常磐津和登	同	同小登名
画工	立齋広重	画家	英 一笑	太鼓	坂田重兵衛	作者	山東京山
同	櫻窓三拙	狂哥	六朶園	人形	吉田東九郎	同	豊竹小玉

○当時のざれ哥も聞およびしを三つ四つしるす

借金を 娑婆へ残して おきざりや 冥土の旅へ ころり欠落 紀のをろか

此たびは 医者も取あへず 死出の山 よみじの旅路 神のまじなひ 作者不知

ぜいたくを 吐て財布の はらくだし 三日こよ転りと 寝つゞけもよし はれます

流行に かくれさきたつ うき中に アしいきますと 恋もする也 思 晴

埋はこむ 焼場は困る 苦の中に 何とて魚 喰へなかるらん 作者しらす

お寺はよろこべ 二日ふたひで佛になったはヤイ

知己ちかひを 往つ返りつ とぶらいの ともにゆかぬぞ 目出度かりける しな猿

註

・早稲田本には上記のように山東京山が死亡者として記されているが、国立公文書館本では左のように別の人名、太夫竹本梶尾となっている。

画工 立齋廣重 画家 英 一笑 同

太夫 竹本梶尾

兄の京伝と共に有名な戯作者である山東京山は、コレラ流行期である安政五年九月二十四日に没している。公文書館本に京山が掲載されていない理由は不明。

・立齋広重は有名な浮世絵師歌川（安藤）広重のこと。この年九月六日没。

○ 八月初日より晦日まで日ごと書ふおぼゆる人の合計

朔日百七十八人 二日百七十八人 三日百七十八人 四日百七十八人 五日二百七十八人

六日二百七十八人 七日二百七十八人 八日二百七十八人 九日二百七十八人 十日二百七十八人

十一日二百七十八人 十二日二百七十八人 十三日二百七十八人 十四日二百七十八人 十五日二百七十八人

十六日二百七十八人 十七日二百七十八人 十八日二百七十八人 十九日二百七十八人 二十日二百七十八人

廿一日二百七十八人 廿二日二百七十八人 廿三日二百七十八人 廿四日二百七十八人 廿五日二百七十八人

廿六日二百七十八人 廿七日二百七十八人 廿八日二百七十八人 廿九日二百七十八人 三十日二百七十八人

一万余に首切人

極多し中

はかみ書とはあり人別りの共殺一万八百七十七人九月におぼゆる

九月におぼゆるはかみ減り一日に六十人におぼゆるはかみ減り

お止 毎朝におぼゆる

或院主の信作一田く八月下月におぼゆる送札九一ヶ奉り来るに

平日の飯焚門敷老翁又町の舟業人と存に大概 存作おぼゆる

と由り大なるうらみはたけの石工定日産も皆くさうて万ふ合ふね

井戸堀職人と殺さるる者少く安堵とありとありん

(九) 八月の死亡者数

○ 八月朔日より晦日まで、日々書上に相成候死人の員数かず

朔日	百十二人	二日	百七人	三日	百五十五人	四日	百七十式人
五日	二百七十七人	六日	三百五十人	七日	四百六人	八日	四百十五人
九日	五百六十五人	十日	五百五十九人	十一日	五百七人	十二日	五百七十九人
十三日	六百二十六人	十四日	五百八十八人	十五日	五百八人	十六日	五百二十二
十七日	六百八十一人	十八日	五百六十一人	十九日	五百九十七人	二十日	四百六十九人
廿一人	三百九十二人	廿二日	三百六十三人	廿三日	三百七十人	廿四日	三百七十九人
廿五日	四百十四人	廿六日	三百九十七人	廿七日	四百十六人	廿八日	四百三十五人
廿九日	四百四十七人	晦日	三百二十三				

× 一万式千四百九十式人 程有之候由

此分全書上、此外に人別なしの者数一万八千七百三十七人、九月に相成候て
九月に至りては大きに減じ、三四日頃は五六十人に相成、夫よりは、はたと
相止、通例に相成申候

或院主の談話はなしに曰く、八月一ヶ月に送礼数凡一ヶ年分も来りし故、
平日は飯焚門番親爺、又門前の無業人を雇あそびとひ、大概世話敷成たり
とも、事欠ことはなかりしが、此度は石工・定日雇も皆々懸りて、間に合かね、
井戸堀職人を頼みたるにて、漸々安堵をなしたりとなん。

(十) 街中のこぼれ話

千住

○千住掃部宿かもんしるべに

奈良屋平次郎

といへる小間物

商人ありける、その

妻、当八月廿日頃

浅草山谷に所用

ありて趣ける

途中、今戸かたの方より

頭を剃やせかれこぼち、瘦枯

色青ざめたる若き男の

素裸むすくにて童等わらわちに

追はれて来るに

行合たり、余りに人の立つとびひつ

喧けんかまびすしければ、何事やらん、狐つきの

類にやと、立よどみて、人に問ふに、

当病の為に死して焼場にやられし

者の、只今蘇生いまたえりて焼場を逃出

此処こゝ彼処かしこをうろつくなりと

語りしかば、例の虚言うそをいふにやと、心

にも留とどまらず、その所ところを立たたり、後のちに

聞きば、是こゝ全くの事ことにきけ

蘇生の若人は市ヶ谷

辺の商家の

倅こゝなりけることぞ

○湯島の辺に貧くくらす

夫婦の者ありけり、夫は

久しく病に臥て、此頃

少しく快気かたに

赴きたれど、未だ立居

自由ならず、その妻なる

ものは、今の世に稀なる

貞節にして、夫が長々の

病に、朝夕の烟り立かぬるを

その身かひぐ敷働き、小商

などしてその日を過し、夕ゆふに家に

帰りて、夫の介抱おろそかならず、

しかるに、その妻こたびの暴病に

犯され、一日病てその夜

終に空敷成けるが、

懐妊して九ヶ月に

成れり、知己者ちかしき

打寄て談合し、

夫は病て

葬式の

手当も

なかりしかば、

手段して金

子を調べ、

菩提所に送り、

焼場にやりて骨

拾ふ日を約し、近隣の

者は立帰りぬ、しかるにその

夜、かの妻なる者、焼場の

葬坊が枕辺に立頭はれ、

夫が長々の病に臥し

不如意の折から、又我身の為に

一倍の物入ありては、後の術計尽

果なんと思へば、是のみ迷ひの

種なりと、さめぐくと打泣ける。

斯する事三夜なれば、葬坊も奇異なる

事に思ひ

その夫が

杖に

すがりて

骨揚こっあげに

来れる日

子細を

尋問、誠に

夢想と

割符を

合せくっせしくっせし

なれば

焼料やきりょうを戻せしくっせし

別に

香奠の

料を

あたへ、回向して

遣はしけるくせ

その後のちは

別に

ふしぎも

なかりし

とぞ

野狐と帚星

八月十八日の事なりとかや、数寄屋町大虎おおとら家主書役しやくやくの者、俄いに異病躰いびんたいにて、同じ長屋ながやの者寄合よしかあ、野狐のぎつねの付たるにやと大勢取巻おほせとりまき、問ひけるに、病人びやうにんの申まをには某それがし左様の者に無之、京都より御用向有、鉄炮洲稻荷社てつぱうすないなぎへ使の者なり、此御用、我等ども四つにて承り候処、二つは道中小田原にて犬の為に命を落し候へ共急なる使故、帰りに敵あだを報はんと思入り。右左みぎひだりに食に餓うたれば此処へ来りしよし、やがて飯をぞ食しける、其間種々しゆんしゆんこと問ひ懸しに、我は八つ狐と申者なり、今度野狐やこに付ねざるには八狐親分三郎左衛門と書、門戸に張べしと咄し終り、すつと立ち、押へ居たる四五人をふり倒し、表の戸を蹴破り馳出いたす故、兪々みなみな跡を追ふたりしに、水谷町角の稻荷の拝殿の前にて頼申といふぞとみへしが、打倒れ正躰なま無をつれかへりて、全快のよし、坂部と申名主の支配下にて届いたを出し候よし、数寄屋町家主磯次郎といふ者の咄しなり

厄神も長居は

ならじあし原や

なかに立つ

帚星には

百舌

天文の事はいざしらす

西方さいほうに星出せいしゅつて、画えに

かける稲の穂のじやく

是を名な呼よびて豊年星と

いふ

出来秋や 空にあらはる 豊年星

松瓶

凡ものは 祝ひがら

よきもあしきも くのじやくに

見やぶるも又一箇いっかんの大語だいごか

量りやうらねる 夜にすいと

出る放屁星

武威ぶいにいわねも

なびくころころ

金瓶

妖怪

○或大諸侯の

藩士木津氏うじなる

人、元來剛勇の

氣象にして、武

術も又類たぐひなき

達人なるが、今度或

夜の事なりとかや

宿直とろしより退出して

宿所に至るが、此人未だなほ

妻もなければ勝手知りたる我が

家の戸を引明け、内に入て寝

所に赴かんとするをり、

屏風の中よりうち

最凄いとじき

異形いぎようの

妖怪

忽然と

して顕れ

出、木津氏い

飛かゝるに、ものくし

ござんなれと身をばひして、腰刀を

抜より疾く妖怪の真向目まっこうめ

がけて切付るに

此形勢このけいせいにへきえきしてや、

註

・いざんなれ

かの妖

怪は身を

おどらし、外との方かた

さして逃んとするを

木津氏透すかさず追とどめ

辛くして是を生捕、

燭をてらしてよくく

見るに、是年経狸としねのりにて

当時奇病の流行せる、その

虚に付込、諸人をたぶらかし

なやむるものとぞ聞えし

○は橋本会所小坂間大英と
 ついで可成ありと云ひの
 暴落病小依の医師の
 又持たる病人とも自己
 茶利医業と云く
 本後さきよりしが

或親を隣小後さきの可
 あつて更お振るさあしく
 疎町して家お移り藤きん
 としけの時氣の如き歌お
 大英が傍おあじさ
 乙氣の寄小依退河
 よと兼お指揮

せうと兼の目お
 更おはさきを角さる内
 乙氣めら橋へ入るういせん
 若しと叫ぶお入るうとあふささささ
 おはさき兼も立務さそのおと

布と見せ縁なとすうち近おの人も走
 あつまる小大英い最さけけお又操へと
 せうおへむぐうととと極乱するうあささびい
 後へ入るうとと絶おその信お息絶けるその火急さるこすろもあははさる
 のおひの勢おあるりおお連あさその一二と後お揚て万二年の後
 かさるりあはんと時の知おお書取つてさささねり



前の大英の法一おはて死せざる君もね多ありや療治うこと尋うお依の
 身解なるおまう如とまうと捕へ又治先と依さと一を執射と責うが如く
 ので退ぐる退るべりおのやいと又と高おお忍死惚との念もあつまる
 知と突おさ血とか一おゆるあり或はささささささささささささささ
 教トさうなと突おお忍死惚の事ともあ

コシラで死んだ医者

○中橋岩倉町に本間大英と

いへる町医あり、こたびの

暴瀉病はせりやまじに余の医師の

見捨たる病人をも、自己おのれ

薬用、医案を尽して、多く

本復させたりしが、

或夜近隣に祝義の事

ありて、夫に招かれ、少しく

酩酊して家に帰り、寝まらん

としける時、兎の如き獣物けもの

大英が傍かたわらに來りしかば

「アし兎の寄に疾退しくけ

ず」と妻に指揮さしず

せしかど、妻の目には

更にふれず、兎角する内

ソし兎めが膝へ入たり、いかんせん

苦しみ叫ぶに、入たりと思ふ所はれ上り

ぬれば、妻も立騒さわぎ、その所を

布をもて結ゆなどするうち、近所の人ども走は

あつまるに、大英は最さいくもるしげに、「アし又腕かひなへ上り

たり、背うしへむへりたり」「と騒さわすうち、こたびは

腹へ入たりとて、終にその仮に息絶ける、その火急なること寸間もあらず、是等

の類ひの奇異ある事、数かずふる違ちがあらず、その一二二つを後に揚て、万々年の後

かゝる事あらん時の心得に書頭かひはすをよみねかし。

前の大英も話しに似て、死せざる者も数多あり、其療治かたを尋るに、彼の

身みなるみくわしみ処をしかと捕へ、又跡先を結ゆなどして、狐付を責せるが如く

いび退ぞくか、退からずは斯の如しと、刃やを当あたわれば、忽たちちこ怒こみのこ怒こるもあり、また

其処を突貫つき、血を出して助るあり、或は其処より黒氣こくたち、光りを放ち

散じたりなど、実に不思議の事どもなり。

註

・寝まらん：寝よう 「寝まる」＋助動詞「ん」

○ 下せる 時々の前表

ふらふ田のる場さふさふさ大流度の在安も教の文御との人あつて人
さふあいなさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
或夕れふあふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

惟ちり我をると愛とえてそまふあらましく若小形にせるとくまこ不
ふさひ身まふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
うま若福後のるさふさ一日痛ても難深まり疾まふさふさふさふさ
微笑のいふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

さふさ波如の下ふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
初男女をさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
愈々若着属若うのれあふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
吾の我れ一人も送ふさふさ若や入るさふさふさふさふさふさふさ
の麻のりへさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

ふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
さふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
れはさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
若て若若う若うと若ふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
あり且安あらしと若らふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

此小甥のまふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
六月若若ふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
ふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ
若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若
若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若若

○時節の前表

こゝは高田の馬場辺に、去る大諸侯の屋敷守・森山丈助といふ人あり、此人
武事には達したれども、世事に疎きと思はれたり、頃しも五月の事なるが
或々、気分悪敷、独身の心安さは夜食も喰す寝たるが、夜半の頃は枕辺に
誰やら座すると夢を見て、覚ればゆめにあらずして、図に頭はせるごとくなれ、不審
に思ひ尋れば、我は厄神の王なるが、四五日宿りを仮せよといふ、這は迷惑の所望
かな、吾独住の事なれば、一日病ても難渋なり、疾立出よと叱したれば、彼の老人は
微笑つ、いやとよ貴辺は悩まじ、宿だに仮して給はらば、外に厄介なるまじといふゆへ
さらば彼処の一ト間に入たりと見しは幻夢現、老人やがて禮をなし、渠等は
僉々我眷属、宿りの礼には斯こそと、図のごとく端書を教へ、是を門戸に張
置ば、我が徒一人も這入まじ、若や入たる家あらば此札をもて身内を撫、其病人
の床の下へ敷て置なば命を欠ず、又藥方を伝授なして、必らず此年秋
に至り、多くの人を助けよと、伝へ終りて、一ト間に入しが、翌日其処の一ト間に物
なく、自己も昨夕の悩みに似ず、最速く起たれば、例のごとくに庭へ出ず。中間共
は是を見て、昨日の熱の様にては斯速に出勤は在すまじ、いと思ひしなど語るに
付て、厄神が宿りを仮に來りしと話せば、下部も半真半疑、自己も一つの疑ひ
あり、且安房らしと恥らいて、其後は人に話しもせず、六月も過、七月初旬、築
地に甥の奉公せる屋敷へ用あり、赴きたるが、彼屋敷なる足輕頭、跡追來り
此六月、甥君に話しの有しと聞、厄神除の札二枚、且伝方の丸藥を製して
与へ給はらずや、今我部屋に熱病にて最悩める者兩人ありと、強て乞れて
黙止がたく、甥が宅にて是を拵へ与へたりしが、其翌日より、病人食氣を催

註

・禮：敬うこと、敬意を表すこと

一々迷ふ全懐ふせとあり是彼の甥が六月中ち利足録ふまう一付
 ありのさう
 愛お液と飲一うと他人すうものともんまうの彼の願ふあく大きかれと
 願ふ
 願ふ一願ふくともえ交る中へ入酒れ若あり大き小是と懸かせがその願ふ
 病付死一うより一を外憂候の候ありくれとえりの多きより又奇とすう老人の
 言ふは秋流りといひ一うれ衣高の邪といふ文字あて候の懸病あり候と
 ぬ

安政五年六月廿日
 後一結是り忘々年
 邪神王 定保

指形
ベムニ

(十一) 守の札

日占圖

白澤之圖

此の二の意は
 枕あそびの事
 とていふゆゑなり
 ぬらひの形
 神のちがせ活と
 中へ入るの事
 ぬらひの形
 ぬらひの形

于時安政五
 戊午季槐九月

天壽堂藏梓

實

して速に全快なせしとなり。是彼の甥が六月中、土用見舞に來りし時、
夢物語を成したるを伝へ聞たるものとなん。夫よりは彼の屋敷にて大きに札を
珍重し、我もくと乞受る中に一人酒狂者あり。大きに是を悪口せしが、その夜に
病付死したるよし。其時不思議の験ありて、札を乞もの多きよし、又奇とするは老人の
言葉、此秋流行といひしより、札の名当の邪といふ文字にて、例の熱病ならぬを察
しぬ。

安政五戊午年五月廿五日の
夜の約定を忘た乎
邪神主 定保 印

指形
べに也

(十一)守り札

白澤上圖

毎夜この巻を

枕にそへて臥す

ときは、凶ゆめをみず

もつゝの邪氣を

けんぬなり

神たちが せ話を

やく病このすへは

もつなかとみの

はらひきよめし

于時 安政五

戊午 季穰九月

天壽堂 蔵梓

印

註

- ・白沢(はくたく) 中国に伝わる瑞獣(神獣・聖獣)の一種。人間の言葉を解し、万物の知識に精通するとされる。その姿を描いた図画は魔除け(厄除け)として用いられる。
- ・中臣の祓い・六、十二月の晦日に朝廷で行う大祓、およびその祓詞(はらえことば)の別称。中臣氏が司っていたので、こう呼ばれる。
- ・もつ